

# ゼミナール活動における地域をテーマとした学習モデルの作成

～三郷町・龍田古道を事例として～

## Learning Model Focusing on a Particular Region in Seminar Activities

－ A case study of Tatsuta old road in Sango-cho, Nara －

岡野 聡子

Satoko OKANO

### 要旨 (Abstract)

本稿は、筆者が2016年10月から始めた地域をテーマとしたゼミナール活動を報告し、その教育実践の学習モデルの作成を目的としている。2016～2017年度のゼミナール活動を事例として取り上げ、学生の学びの成果に言及し、本実践から学生が身に付けられると期待する資質・能力（技術）を提示した。

キーワード：地域活動、地域連携、大学教育、ゼミナール活動

### I. はじめに

本稿は、筆者が2016年10月から始めた地域をテーマとしたゼミナール活動を報告し、その教育実践の学習モデルの作成を目的としている。

2006年の教育基本法第7条の改正および2007年の学校教育法第83条の改正<sup>1)</sup>では、大学における教育研究の成果を広く社会に提供することが掲げられ、2013年に文部科学省が「地（知）の拠点整備事業（略称：大学COC（Center of Community）事業）」の公募を始めたことが契機となり、地域と大学の連携による人材育成を組織的に推進する取り組みが行われるようになった。大学COC事業では、目指すべき新しい大学像として、学生がしっかり学び、自らの人生と社会の未来を主体的に切り拓く能力を培う大学、地域再生の核となる大学、生涯学習の拠点となる大学、社会の知的基盤としての役割を果たすことが掲げられ、本事業目的には、「自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決、更には自治体を中心に地域社会と大学が協働して課題を共有しそれを踏まえた地域振興策の

<sup>1)</sup> 教育基本法第7条：大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。②大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。

学校教育法第83条：大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。②大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

立案・実施まで視野に入れた取組を進める」とある。大学は、教育・研究・社会貢献を軸に運営をしているが、社会貢献＝地域貢献の取組みへの強化が本事業によって明示されたといえる。さらに、2015年には、2013年度・2014年度に実施された大学COC事業をさらに発展させた「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業～地（知）の拠点COCプラス～」の公募もあり、今や大学に期待されていることとは、地域の課題解決に留まらず、地域の産業を自ら生み出し、地域を担える人材の育成も視野に入れた取組みが求められていると言える。

本学の場合、現時点では大学COC事業や大学COCプラス事業といった組織的な取組みはない。しかし、各ゼミナール活動において、それぞれの教員がフィールドを持ち、学生の教育活動にあたっている。教員単位での取組みは規模が小さいが、それぞれの取組みを公表・共有し、集積することによって、組織的な取組みの第一歩になると考える。そのためには、ゼミナール活動を学習モデルとして汎用化しておくことが必要になると思われる。

## II. 先行研究

地域連携をキーワードとしたゼミナール活動について、先行研究の調査を行った。先行研究の調査目的は、ゼミで実施する場合の連携先の傾向と教育活動の内容・方法を知るためである。まず、「なに」（研究目的・内容）を「だれ」（連携先・協力者）と「どのように」（活動型）しているかである。CiNiiにて、「地域連携」・「大学」と検索すると5032件、「地域連携」・「大学」・「ゼミ」では28件の結果であった。（2019/7/15現在）この28件のうち、3件は地域連携の内容でないため分析対象外とし、25件に絞った。次に、著者が同じであり、内容が類似した論文が3件あったため、この3件を同一カテゴリーとし、計21件（表1）から、タイトルを並べ、発表形式、連携先、活動型に分類して整理した。活動型に関しては、現場体験型、課題解決型（調査・企画・提案）、事業企画型とした。課題解決型の中にある「企画」と事業企画型の違いについては、事業企画型が企画の運営実施を成果としている点、課題解決型は、企画の検討や立案を成果としている点にある。

表1 CiNiiにおける「地域連携」・「大学」・「ゼミ」の3つのキーワードにて検索された実践報告・論文

	発行年	タイトル	発表形式	連携先	活動型
1	2019	短期大学生における継続的地域連携活動の学習効果について：料理教室準備ゼミ活動報告	実践報告	児童擁護施設	課題解決型（企画）
2	2018	学生提案成果報告 栃木県平成29年度大学・地域連携プロジェクト支援事業 宇都宮共和大学シティライフ学部 小浜駿・和田佐英子・吉良貴之ゼミ（県外協力ゼミナール 中央大学商学部御船洋ゼミ・城西大学経済学部安田新之助ゼミ）若者の人生選択と居住地選択（1）就活編	実践報告（学生）	自治体	課題解決型（調査）
3	2018	大学におけるアクティブラーニング推進のための学内連携体制の構築：「『大学は美味しい!!』フェア」参加に向けた商品開発、販売実習の実践を手がかりに	論文	企業 NPO	事業企画型
4	2018	ゼミにおける地域連携の取組みについて：豆腐づくり体験プログラムの計画と実施 <「食のプロジェクト」学生報告>	実践報告（学生）	企業	事業企画型
5	2018	住民の地域課題の解決力を高める実践：福祉SOSゲームの可能性	論文	自治体 地域住民	課題解決型（提案）
6	2018	地域連携型PBI「西京銀行 課題解決型インターンシップ（若旅 in やまぐち）」の実践：地域ゼミ（地域課題によるPBL体験）の一事例として	実践報告（学生）	企業	課題解決型（企画）
7	2018	大学教育における地域連携活動のあり方に関する一考察	論文	企業	事業企画型
8	2018	松下ゼミと地域連携：若者たちの笑顔と奮闘（特集 人間社会学部における地域連携の取組み：これまでとこれから）	実践報告	自治体 企業、他	現場体験型 事業企画型

9	2018	PBLを基にした大学と社会（地域）をつなぐ調査研究：～若者の朝食調査～	論文	自治体	課題解決型（調査）
10	2018	専門演習における地域と連携した取り組み（3）	論文	自治体	現場体験型 事業企画型
	2017	専門演習における地域と連携した取り組み（2）宮代町里山自然体験活動を中心に			
11	2017	地域連携による若年世代の社会教育利用促進施策に関する一考察： 浜川市中央公民館における「ジブンと社会をつなぐゼミ」でのキャリア教育の実践と課題	論文	公民館	現場体験型
12	2017	空き店舗活用を通じた大学におけるアクティブラーニングの実践： 柏崎市委託事業「まちかど研究室」を事例として	論文	自治体	課題解決型（企画）
13	2017	保育者養成校の保育表現技術系ゼミによる地域連携活動での学びの一考察：2015・2016年学生へのアンケート結果から	論文	保育所 NPO、他	課題解決型（企画）
14	2017	博物館職員と大学生とが「協働」する試み：「秋田大学地域連携プロジェクトゼミ」実施報告	実践報告	自治体	課題解決型（提案）
15	2016	大学の地域連携による学生教育の取り組み～地域資源を活用した商品開発プロジェクト～	論文	自治体 ボランティア 団体	事業企画型
16	2015	K.I.T. 空間情報プロジェクトの活動成果と地域連携について	実践報告	財団、コンサル、企業	現場体験型
17	2015	地域連携型親子体操教室におけるアクティブ・ラーニングの実践	論文	自治体	現場体験型（学内にて）
18	2014	千葉県花見川区魅力発信プロジェクト「花見川どっとcom!」の運用体制作りと今後の展望	論文	自治体 高校	課題解決型（企画・提案）
19	2014	地域連携PBLの試行的実施の成果と課題：名古屋市名東区を舞台としたゼミ活動における就業力育成（2・完）	論文	自治体	課題解決型（企画）
	2013	地域連携PBLの試行的実施の成果と課題：名古屋市名東区を舞台としたゼミ活動における就業力育成（1）			
20	2013	地域連携型教育について：ゼミの活動を通して（2）	論文	農園 商工会	現場体験型
	2012	地域連携型教育について：ゼミの活動を通して（1）			
21	2011	大学コンソーシアム石川ゼミナール連携型事業における学生の地域連携活動	論文	大学コンソーシアム	現場体験型 課題解決型（調査）

発表形式は、実践報告が7件であり、そのうち3件がゼミ学生による報告である。論文としては、14件であった。連携先は、自治体が最も多く、11件であった。自治体以外の連携先は、企業、NPO、地域住民、ボランティア団体、財団、コンサルティング業者、幼稚園、保育所、児童擁護施設、高校、公民館、農園、商工会、大学コンソーシアム等と多様である。活動型を現場体験型、課題解決型、事業企画型に分類した結果、現場体験型が4件、事業企画型が4件、現場体験型と事業企画型の混合が2件、課題解決型が10件、現場体験型と課題解決型の混合が1件であった。課題解決型が10件と最も多いが、この点に関しては、近年、アクティブラーニングやPBLの教育手法が注目を集め、教育実践に取り入れられてきたこと、課題解決型の授業方式が、学生の主体的学びの育成に好影響を与えると考えられていることがあげられるだろう。

### Ⅲ. ゼミナール活動における地域をテーマとした教育実践の概要

本教育実践を行うフィールドは、奈良学園大学が位置する三郷町である。以下、教育実践のフィールドである三

郷町、協力団体、ゼミにおける教育実践の概要である。

## 1. ゼミ活動のフィールド概要および協力団体について

### (1) 奈良県生駒郡三郷町（さんごうちょう）について

奈良県生駒郡三郷町は、奈良県の中で最西部に位置している。三郷町は、金剛生駒紀泉国定公園の美しい自然環境に恵まれているだけでなく、大阪との交通の便もよい。町の北西、隣接の平群町域内に位置する信貴山朝護孫子寺は、標高437mの信貴山の東の中腹にあり、湯の香ただよう旅館街が軒を連ねている。南は、万葉の昔から歌に詠まれた竜田川がこのあたりの大和川といわれおり、三室山とともに数多くの古歌が残されている。また、崇神天皇の創建で風の神として古い由緒をもつ龍田大社、観音寺の地藏菩薩立像（重要文化財）、薬隆寺八幡神社（重要文化財）、秋留八幡神社、春日神社の一針薬師笠石佛（快慶作風）、聖徳太子の休憩の場であったと伝えられる平隆寺など、貴重な文化財を持つ古社寺が町内に数多くある。

令和元年6月1日現在、人口は22,999人、世帯数は10,503世帯である。古くから草履の産地で、最盛期には全国の8割が生産されていた。しかし、伝統ある履物産業も生活様式の変化に伴い、需要が減少し、従事する世代も少ない。現在では、健康ブームにあやかって「ケンコーミサトツ子」を製作し、全国にシェアを広げている。

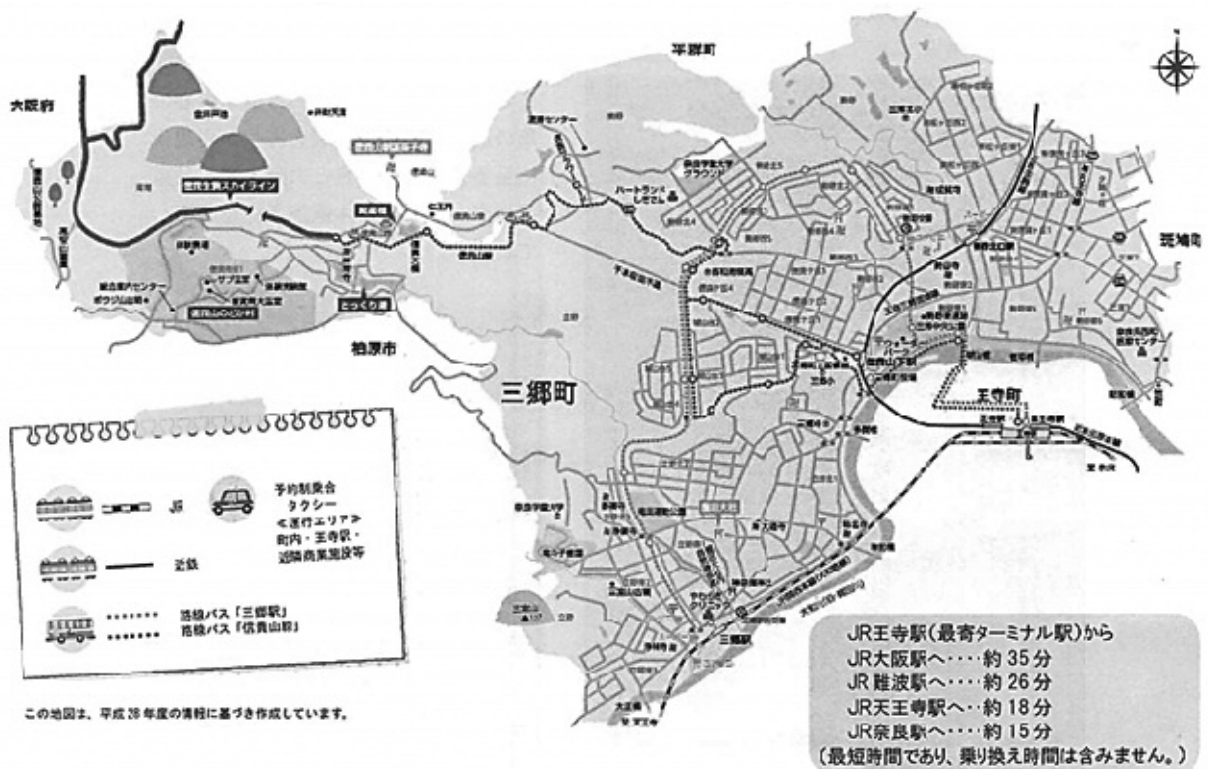


図1 三郷町の地図

出典：三郷町役場まちづくり推進課（2018）「とかいなか ならさんごうが ちょうどいい」p.10

また、三郷町では「安心して暮らせるまちづくり」を目指し、さまざまな取り組みが行われている。

#### ◆「暮らし」に関する取り組み

アパートの家賃助成、空き家リフォーム代補助、空き家バンク、イーストヒルズ勢野の宅地販売、木造住宅の耐震改修補助、太陽光発電設置補助、エネファーム補助、生ゴミ処理機の購入助成、雨水タンクの設置助成、防災行政無線メール配信サー



ビス、防災拠点事業（三郷町立学校給食センター）、予約制乗合タクシー、ふれあい朝市事業、子ども見守り隊、三郷町ふれあい農園、防犯カメラ設置補助制度、フレイル健診の実施（大阪大学との共同研究）、がん検診の実施

◆「子育て」に関する取り組み

子育て支援センター、保育サービスの充実、学童保育、にほにほランド事業（園庭解放）、こども医療費無料、保育料第2子以降無料、私立幼稚園の保育料軽減、不妊治療費助成等、就学援助、育英振興助成金、三郷町まち歩きアプリの提供

◆「学ぶ」に関する取り組み

三郷小学校・三郷北小学校、三郷中学校、奈良サテライトオフィス35の運営、三郷町立図書館、生涯現役応援センター『i-サポ』

◆「おでかけ」に関する取り組み

三郷町スポーツセンター、元気★ひまわりクラブ三郷、三郷町ウォーターパーク

出典：三郷町役場まちづくり振興課（2018）「とかいなか ならさんごうが ちょうどいい」

2018年8月には、SDGs 環境未来都市宣言を行い、SDGs 推進のために、今までの地球温暖化対策の取り組みをさらに充実させるとともに、災害にも強く、住民の健康寿命を伸ばすことを目的としたまちづくりを目指している。

## （2）風の郷龍田古道プロジェクトと龍田古道について

風の郷龍田古道プロジェクトとは、「産官学地域活性化連絡協議会」（三郷町商工会・三郷町・奈良学園大学・町民有志）の中のまちづくり事業の一環として立ち上げられた。日本最古の街道「龍田古道」に着目し、風そよぐ「龍田の郷」の景観を保全しながら、龍田大社を中心とした風の郷をイメージさせるまちづくりを推進している。

プロジェクトの発足経緯は、2015年10月の三郷町産官学地域活性化連絡協議会が「みんなでまちづくりを考える公開講座」を開催したことに始まる。2016年に講座にてコミュニティビジネスを学んだ町民有志が地域活性化に関する事業計画案を発表し、その中で、三郷町・龍田古道の日本遺産登録に向けた動きと連動する形で龍田古道プロジェクトが発足した。

2017年に、まちづくりマップ製作に取りかかり、写真家の澤戔三（さわ しゅうぞう）氏の協力のもと、以下のポスター製作（写真1）が行われた。2018年には、日本郵便株式会社近畿支社からオリジナルフレーム切手「龍田古道 神降りの風道」も販売され、テレビ取材も受けるなど、メディアの注目も集めている。



写真1 風の郷龍田古道プロジェクトと三郷町が協働して作成されたポスター

龍田古道は飛鳥時代以降、河内（大阪）と大和（奈良）を結ぶ山越えの道として利用されてきた歴史街道であり、推古天皇により置かれたわが国最初の官道とも言われています。

古代大阪湾の港・難波津（なにわづ）から四天王寺を經由し、斑鳩の里・法隆寺までを結ぶルート沿いには、道の整備に関わったとされる聖徳太子ゆかりの寺院が建ち並んでいました。壬申の乱の舞台となったほか、天皇や官人、遣唐使・遣隋使も往来したのがこの道。シルクロードの終着点とも言われる奈良の都・平城京へと大陸文化を運ぶ際にも重要な役割を果たしました。

龍田古道が通る市町村の中で奈良県最西部に位置する三郷町（さんごうちょう）は、都人が西国へと向かう時に、見送りの家族と別れた送迎の地でもあります。「龍田大社」には龍田山山上に降臨された風神様が祀られており、旅人は皆ここで、遠路となる旅の安全を祈願しました。

龍田山から待ちへと延びる「神降りの風道」（かみくだりのかざみち）は今も、いにしえ人が歩いた自然風景を色濃く残しています。現代の町並みに姿を変え風の郷（かぜのさと）を横切る街道にも同じだけ神々の清々しい気が溢れています。

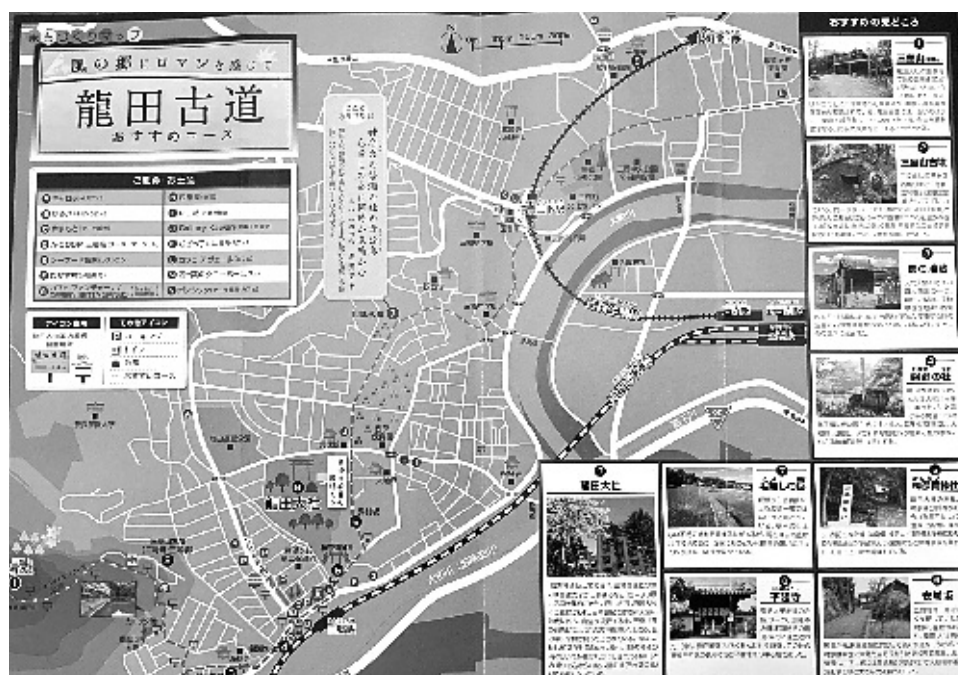


写真2 「神降りの風道 龍田古道 まちづくりマップ」

次に、龍田古道の解説である。（2019年に風の郷龍田古道プロジェクトが作成したパンフレットから）

2019年3月には、風の郷龍田古道プロジェクト、三郷町ものづくり振興課、奈良県地域デザイン推進課の協働によるマップづくりが行われ、現在では三郷町内にて配布されている。

## 2. 地域をテーマとしたゼミナール活動における教育実践の概要

教育実践の概要は、表2の通りである。2017年度から、3・4年生の合同ゼミを実施し、先輩から後輩に調査の成果を引き継ぐ形で運営をしている。

表2 ゼミナール活動のテーマと内容・協力者

年度	学生	テーマと内容	協力者
2016	3年生 (10名)	テーマ:「まちづくりをどのように行うか～地域資源の発掘手法～」 内容: 三郷町まちづくり講座への参加 龍田古道(住宅街方面)の現地調査 龍田古道の周辺散策マップ作り 龍田古道の報告会への参加 「日本遺産とまちづくり」学習会への参加	・風の郷龍田古道プロジェクト(町民有志) ・三郷町役場(総務課・ものづくり振興課)
2017	4年生 (10名)	テーマ:「三郷町原風景～地域を知る・地域に学ぶ・地域を創る活動を通して～」 内容: 三郷町民へのインタビュー調査(計:32名) 大和川七夕まつり「燈火会」事業の企画・運営	・三郷町民 ・風の郷龍田古道プロジェクト(町民有志) ・株式会社岡伸
	3年生 (7名)	テーマ:「地域住民と共に活動をする意義とは」 内容: 龍田古道(住宅街方面)の現地調査 龍田大社の歴史を学ぶ 大和川七夕まつり「燈火会」事業の企画・運営	・風の郷龍田古道プロジェクト(町民有志) ・株式会社岡伸
2018	4年生 (7名)	テーマ:「地域住民と共に活動をする意義とは」 内容: 龍田古道(住宅街方面)の現地調査 大和川七夕まつり「燈火会」事業の企画・運営 テーマ: 個々の興味関心をどのように研究につなげるのか 内容: 文献研究を通して、先行研究の方法を学ぶ	・風の郷龍田古道プロジェクト(町民有志) ・株式会社岡伸
	3年生 (10名)	テーマ:「三室山・山越方面の龍田古道の現地調査」 内容: 龍田古道(三室山方面)の現地調査 三室山の整備について(NPO法人桜の会)	・NPO法人龍田・三室山桜の会 ・帝塚山大学・牟田口章人教授
	4年生 (11名)	テーマ:「地域を舞台にした現地調査の方法と事業企画」 内容: ①地域資源の活用と課題～農業公園信貴山のどか村を事例として～ ②映像保存の意義とは～龍田古道を事例として～	・風の郷龍田古道プロジェクト(町民有志) ・農業公園信貴山のどか村
2019	3年生 (7名)	テーマ:「地域活性化が求められる理由とは～「まちが消える」ことを実体として考える～」 内容: 先行研究(河合雅司『未来の年表1』『未来の年表2』) 龍田古道(住宅街・三室山方面)の現地調査 三郷町を知る(外部講師:風の郷龍田古道プロジェクト・西尾顕子様、三郷町役場総務課・安井規雄様) 映像保存の手法を学ぶ(外部講師:牟田口章人教授)	・風の郷龍田古道プロジェクト(町民有志) ・三郷町総務課 ・帝塚山大学・牟田口章人教授

本ゼミナール活動における教育実践は、現場体験型・課題解決型(調査)と位置付けている。専門ゼミでは、質的研究法(フィールドワークの技法、インタビュー調査方法、質的内容分析の手法)の教授を主としており、また、筆者がキャリア教育を担当していることから、地域をテーマとした教育実践にて、学生が地域の人、モノ、コトに触れる中で、どのようなキャリア形成能力(社会人基礎力、等)が培われるか、開発されるかを検討することも関心事の一つとしてある。

次に、筆者が「地域」をテーマとしたゼミナール活動の実施が可能となった経緯である。筆者は、2015年に三郷小学校や三郷北小学校における農業体験学習に学生ボランティアを引率した。その際、学校支援ボランティアコーディネーター(後に、この方が「風の郷龍田古道プロジェクト」代表となる)に仲介していただいた。その後、学校支援ボランティアコーディネーターから、地域活動をする団体、企業を紹介していただき、「地域」をテーマに



したゼミナール活動が可能となった。

#### IV. 地域をテーマとした教育実践の様子と学習モデルの作成

ここでは、2016～2017年度のゼミ活動を中心として教育実践の様子をまとめ、学習モデルを提示する。

##### 1. 2016年度「まちづくりをどのように行うか～地域資源の発掘手法～」

三郷町産官学地域活性化連絡協議会が主催する「みんなでまちづくりを考える公開講座」に参加をした。町民有志から龍田古道の概要の発表、外部講師から地域資源とは何か、地域資源の活用方法と活用するために生じる課題について学んだ。その話をもとにして、田淵友一氏（「風の郷龍田古道プロジェクト」代表）の案内のもと、学生が龍田古道を歩き、地域資源の発掘と地域資源の活用に関する課題を探った。龍田古道を歩いた学生から提出された地域資源の活用に関する課題は、以下であった。

- ・草木の中に放置された持ち主もわからない古民家の空き家をどうするか。
- ・放置耕作地をどうするか。（住民の話によると、そこに野犬がたむろしていてこわい）
- ・児童・生徒の通学路にある緑色のペンキが塗られた歩道は、安全面を考慮して目立つ必要があるの だが、景観の観点からすると違和感がある。
- ・若者が都市に行き、三郷町に戻ってこない現実がある。跡取り問題をどのように解決するか。
- ・歴史的景観をどのように保全するか。（石碑の隣に自動販売機のゴミ箱が置いてある、等）
- ・「毛無丘」と命名されているが、現在では農耕が盛んである。なぜ、そのような名前になったのかを調べたりすることが、地域資源を知ること、活用することの第一歩になると思う。
- ・美しい田園風景をどのように保存していくか。（農業従事者の跡取り問題）

地域資源の活用に関する課題をまとめ、学生視点の地域資源マップを作成し、三郷サテライトオフィス35にて成果報告および町民の方々と情報共有をした。2017年1月には、三郷町産官学地域活性化連絡協議会主催の「日本遺産とまちづくり～日本遺産先進事例「奈良」～」の勉強会に参加をした。



写真3 「みんなでまちづくりを考える公開講座」ワークショップの様子（2016/10/28（金）撮影）





写真4 田淵友一氏と共に館田古道の地域資源発掘に出かける学生の様子（2016/11/18（金）撮影）



写真5 「地域資源の発掘と課題～龍田古道を事例として～」報告会の様子（2016/12/16（金）撮影）



写真6 「日本遺産とまちづくり～日本遺産先進事例「奈良」～」の様子（2017/1/20（金）撮影）

以下は、学生の感想である。

活動日	学生の感想から一部抜粋
2016/10/28（金）	本日のまちづくり講座では、 <u>自分の知らない三郷町の歴史や竜田古道、数々の神社仏閣があるということに気付きました。</u> この講座の中で、「自分達で道標や看板を作る」という話がありましたが、数百年、数千年の万葉集の歌や道標、神社仏閣等が現在も残っていると考えると、自分達が創ったものが数百年経っても残るかもしれないので、想像すると、とても楽しみになりました。

2016/11/18 (金)	三郷町内を探索し、昔からある街並みを見て回った。全く知らなかったことばかりで、面白かった。新しい建物が建つと、そこに昔何があったのかわからなくなるので、現存する古い建物は残したいという気持ちが芽生えた。全く知らなかったものや新しい発見があったので、楽しかった。改善点：石碑の周りをもう少し綺麗にしたらよいと思う。 提案：空き家を工夫して、学生寮にしてみる。三郷町民自身をもっと自分の街を知る機会を増やす。
2016/12/16 (金)	三郷町のまちづくりについての話し合いに参加することによって、「あ、まちづくりに貢献できているな」と感じました。参加する限りは、三郷町のまちづくりに貢献できるように、もっとあの場でも自分が持つ意見を言わなければ、何も変わらないと感じました。最初はあれぐらいの人数でいいと思いますが、これから三郷町を変えていこうとするのであれば、もっと地域住民に運動を呼びかけ、協力していく必要があると思いました。大学生がバンバン前に出るだけでなく、もっと三郷住民ももっと前に出ていけないいけないと思いました。
2017/1/20 (金)	今日参加して思ったことは、日本遺産が認定されることは、大変なことであることを実感しました。色々な審査があり、見て凄いとか、有名だからといって日本遺産になるとは限らないと思い、遺産にする難しさを改めて考えました。日本にある遺産の多くは東日本にあるとのこと。この差はどこにあるのか、西日本と何が違うのか、考える必要が有ると思いました。最後に、1番難しいと感じたのが、審査基準です。歴史的であり、世代を超えて受け継がれているか、また風習等を踏まえたストーリーがあるかというところ、私も考えてみましたが、答えが何も出てきませんでした。発信する明確なテーマが無いと、日本遺産にするのは難しいと感じました。

2016年度のゼミナール活動を通して、まず、地域への理解が深まり（自分の知らない三郷町の歴史や竜田古道、数々の神社仏閣があるということに気付きました、新しい建物が建つと、そこに昔何があったのかわからなくなるので、現存する古い建物は残したいという気持ちが芽生えた）、課題発見の言語化（改善点：石碑の周りをもう少し綺麗にしたらよいと思う。提案：空き家を工夫して、学生寮にしてみる。三郷町民自身をもっと自分の街を知る機会を増やす）、参加者としての主体的態度形成（三郷町のまちづくりについての話し合いに参加することによって、「あ、まちづくりに貢献できているな」と感じました。もっとあの場でも自分が持つ意見を言わなければ、何も変わらないと感じました）、地域資源を活用した課題に対する困難の実感（歴史的であり、世代を超えて受け継がれているか、また風習等を踏まえたストーリーがあるかというところ、私も考えてみましたが、答えが何も出てきませんでした。発信する明確なテーマが無いと、日本遺産にするのは難しい）といった学びがあった。

## 2. 2017年度「三郷町の原風景～地域を知る・地域に学ぶ・地域を創る活動を通して～」

2016年度に本学が位置する三郷町を中心として、まちづくり講座への参加、龍田古道の地域資源発掘調査、地域活性化事業の企画・運営（大和川七夕まつりにおける燈火会事業）を実施した。2017年度のゼミでは、4年間の集大成として、「三郷町の原風景」をテーマとし、三郷町の歴史や文化、そこに住む人々の生活実態や三郷町に対する地域への思いをインタビュー調査から明らかにすることを目的とした。住民の地域への思いを知ることによって、地域住民の考えをベースとした地域活性化事業の立案のヒントになると考えたからである。

インタビュー調査の実施にあたっては、リレーインタビューの方式をとった。まず、三郷町まちづくり講座に参加をしている方々の協力を得て、インタビュー調査を開始した後、インタビューをした人から次のインタビュー対象者を紹介してもらうという方式である。インタビュー調査を実施する前に、①インタビュー調査を実施する際の研究倫理について、②半構造化インタビューの手法解説およびインタビュー項目作りの講義を行った。インタビュー項目は、「地域活動に参加をされている場合、どのような活動か具体的に教えてください、三郷町のお祭りやイベントは、どのようなものがありますか、三郷町の好きなのところを聞かせてください、よく行く場所はどこですか、地域における思い出を聞かせてください、今後の三郷町をどのようにしていきたいとか、何か思いはありま

すか、まちづくり講座へは、どのような思いで参加をされたのですか（まちづくり講座参加者のみ）」である。

本授業の到達目標は、①各人、インタビュー調査を実施し、600～800字でまとめることができる（可能な場合、写真添付）、②A4・10枚（8000字程度）のリサーチペーパーを書く事ができる、③要点をまとめ、他者にわかりやすく成果報告の発表ができるとした。本教育実践を通して向上させたい資質・能力（技術）は、①半構造化インタビュー調査手法の基礎を知り扱えること（研究手法の獲得）、②他者の話を聴き、他者の思いを知る態度を身に付けること（傾聴力、情報収集力）、③聞き取った内容を報告書としてまとめること（情報編集力）、④得られたデータから何が言えるかを発表できること（情報発信力）である。

10名の学生によって集められたインタビューデータは32名分であり、年齢層は19～84歳までと幅広い。対象者の属性は、会社員2名、年金生活者6名、大学生7名、パートタイム労働者、専業主婦、クラシックバレエ講師、大学講師、学校支援ボランティアコーディネーター、三郷町役場職員、学校の警備員、元小学校校長、学校評議会委員、三郷町商工会経営指導員、自営業7名（醤油製造業、靴下製造業、鉄製品加工業、信貴山のどか村、鍼灸指圧治療院、クリーニング業、習字教室経営）であった。

以下は、学生によるインタビュー調査結果の報告書の一部抜粋である。

テーマ：新旧の調和の取れた三郷町を目指して

小学校の頃の思い出で、現在、工事中の三郷中学校のところに、昔は三郷小学校が建っており、その前には善福寺があった。お寺のお堂などを解体して、小学校が建てられたため、校舎まで行く階段などは、お寺の参道が残っていた。小学校時代は、ポン野球（軟らかいボールを階段の角に当ててその反発を利用した遊び）、ドッジボール、ビー玉遊び、瓦当て（昔はよく瓦が落ちていた）、秘密基地遊び、昆虫採取（この辺りでは、クワガタのことをゲンジと呼んでいる）、ドジョウやしじみを捕ったりして遊んでいた。

現在、消防団に参加しており、地域の防災や火事、災害などが発生したときの支援活動をしている。最近では、2017年10月22日にきた台風による雨の影響で和川の水位が上がって、氾濫が起きた時に現場に行き、道路の警戒や警備などを朝4時頃までやっていた。活動に参加する理由として、父がやっていたことが大きい。父が辞めた時の欠員が出た時に次の人を探す必要があり、参加することにした。地域における思い出については、①小学校5、6年生頃に三郷小学校が100周年を迎えて、蒸気機関車「多聞号（たもんごう）」を小学校に運んだこと、②昔はJRの駅がなく、40年ほど前にできた駅であって、開業したお祝いとして、この辺りの地域のお神輿（太鼓台）を現在のバス停の辺りまでもっていったこと、③信貴山から近鉄電車の信貴山下駅までケーブルカーがあり、その辺りにケーブルカーを動かす動力を作るための変電所があり、雷がそこによく落ちていたこと、④立野の交差点の辺りに養豚場があり、ある時、火事になり、豚たちが道を走っていたということがあったということ、⑤雨が近づくと風向きが変わるということである。その方法とは、JRを大阪方面に行く時の鉄橋のところを電車が通るときの音が聞こえてくると、次の日は、雨だとおっしゃっていた。

三郷町の好きなお店では、お寺の修行で8年ほど京都の宇治にいた頃、京都の独特な話し方やイントネーションにあまりなじみず、生まれ育った三郷町を思い出すことも多かったので、三郷町の全てがいいなと思う。三郷町は坂道が多いので、自転車が少ないこともいい。それは、車やバイクを運転していて、走りやすいからである。三郷町のお祭りについては、龍田大社の秋祭りが有名である。三郷町にある龍田大社と斑鳩にある龍田神社の間を昔は馬に乗り、往来していたという。そして、現在では、4年に一度、各地域のお神輿（太鼓台）を役場に集結させて、イベントをしていると言っていた。

今後の三郷町をどのようにしていきたいかを尋ねると、昔とは変わって、たくさんの方が三郷町に入ってこられていて、「和を以て貴し」があるように、生まれ育ちも、暮らし方も食べ物の好き嫌いもあるように人間はいろいろな考えや思想などもっているが、自分のことだけを主張するだけではなく、様々な人が仲良く、共存して暮らしていけるようになればいい。ギクシャクした町ではなく、皆が声を掛け合って過ごせる町がいいなと思っていると言っていた。これからも住み続けたいかについては、高齢化も進んでいて、車やバイクが乗れなくなると、住みにくくなる町だと思うとのこと。スーパーが少ないことや遠くてそこまで行くことができなかつたりするからだと言っていた。

最後にまとめとして、三郷町にこれから先に残しておきたいものや場所などにはありますかについては、できればこれ以上開発をしないで、昔の風景をそのまま残しておいてほしいと思う。開発＝自然破壊とまでは言わないが、開発をしないと地域は発展していかないと思うところもあるけれど、上手く調和を保ちたいと思う。寺社など、跡継ぎ問題で減っていつい

(2017/10/27 (金) 10:00-11:00)

以下は、インタビュー調査後の学生による成果報告会の一部抜粋である。



今回、私は三郷町に住む方たちにインタビューを実施し、三郷町の良いところや、これからどのようにしてまちを発展させていきたいかを聞いた。初対面の人が多く、初めは何を話したらいいのかわからなかったが、皆さんがとても温かく接してくれて、インタビューをしやすい雰囲気があった。「悠々卓球」にお邪魔させていただいた時も、練習中にも関わらず、時間を割いて話を聞かせていただけたのは本当に嬉しかった。また、自分たちで足を運んで話を聞きに行ったほうが、より良い話が聞けると実感した。昔話を聞いた時、三郷町は今よりも栄えていたということもわかり、どうして今になって人が減ったかという理由も伺うことができた。インタビューにて、「三郷町の良いところ」については、皆さんの回答がよく似ており、空気が良くて、住みやすくて、綺麗な夜景が見られることなどである。私自身、夜に大学から帰る時、大学構内の坂道を下りながら、夜景が綺麗だと思ったこともあるので納得できた。Oさんは、信貴山の頂上から綺麗な朝日が見れるとおっしゃっていたので、三郷町に住む方には一度見てもらいたいと思った。一方で、三郷町の不便なところについて、スーパーやコンビニが少なく、家から買い出しに出かけるときは困るという話も聞いた。私自身も大学まで歩いて行く時は、きつい坂道だと思いながら歩いているので、高齢者の方々には負担になると思う。車や自転車などを使っているとおっしゃっていたが、車だと隣町の王寺町まで行ったほうが都合が良い（商業施設が充実している）という話も聞き、三郷町に商業施設、観光事業、若者が就労できる会社といったものが必要であると感じた。

これからの三郷町をどのようにしていきたいかについては、若者に選ばれる街にしたいという方が多数おられた。大学入学当初、すごい田舎町で何もなかったところだと思っていたのだが、4年間、三郷町に位置する大学に通学し、緑の多さや人の温かさに触れることができ、愛着が湧いた。若者に三郷町のアピールをするためにも、信貴山のどか村や保養所等のアピールをもっとする必要があるのではないかと考えた。小さい頃から三郷町に住んでいる人は少なかったが、大人になってから嫁いできたり、引っ越してきたりなどの理由で住んでいる人が多く、そのほとんどが三郷町に来てよかったと言っていた。また、色々な人と話す中で、どの方々も三郷町という地域について深く考えておられると思った。高齢者が多く、若者は外に出て行くとおっしゃっていたが、温かさのある街であるからこそ、町政50周年も迎えられたのではないかと考えた。これから少しずつでもいいので、三郷町に住んだり、遊びに来たりする人が増えたらいいと思った。

今回、私たちは三郷町に住む8人の方々にインタビュー調査を実施した。様々な年齢層の方に話を伺い、どの方も三郷町が好きで三郷町のことを深く考えておられることを実感した。インタビューでは、その人の生い立ちや三郷町の好きな場所、逆に不便なところ、ボランティア活動、今後の三郷町、若者への願いなどの質問をさせていただいた。今回、インタビューさせていただいた方のほとんどは、生まれが三郷町ではなく、何かの理由で引っ越してきた方が多かった。そのため、「三郷町の原風景を知る」というテーマからは外れている部分もあるかもしれない。

三郷町で子ども時代を過ごした方のインタビューでは、幼い頃、竹でチャンバラをするなどの山遊びや大和川での川遊びなど、外で遊ぶことが主流だったようだ。若い年代になってくると駄菓子屋に行き、買った駄菓子を持って公園に行き、友だちと広げて食べていたという声もあった。また、三郷町の好きなところや不便に感じていることに関しては、どの年代もほぼ同じであり、空気、夜景が綺麗、自然が多く緑も多いなどの意見であった。不便に思っていることは、電車やバスなどの公共交通網に関することが多く、スーパーやコンビニも少ないため、買い物に行くのにも一苦労だということが住民の意見だった。ボランティア活動に関しては、さまざまなものがあり、小学校に行って草刈や田植えの授業をする方もいれば、三郷小学校のボランティアコーディネーターの方もおられたし、戦争の語り部さんをやっておられる方もおられた。視覚障がいをもつ方のための広報誌の読み手をされている人もおられた。さまざまなボランティアがあり、私自身知らないことばかりだった。今後の三郷町については、おじいちゃん世代の方たちは口をそろえて、「信貴山のどか村」のことをあげていた。のどか村をもっと売り込みたい、子どもも大人も楽しめる施設にしてほしい、温泉などの娯楽施設があればなどの意見が多かった。信貴山を綺麗に整備し、全国にアピールしたいという声もあった。若者への願いでも、どの方も言われることは同じようなことで、三郷町に興味をもち、地元を愛してほしいということだった。三郷町は、何も無いと思われがちだが、図書館などに行くと、ボランティアの募集だったり、三郷町の情報があふれているようだ。

私は、大学1年生の時に三郷町に引越し、三郷町に住んでいるので少しずつ愛着が湧いてきた。また、このようなインタビュー調査をして、はじめて知ったこともいっぱいあったし、より三郷町への関心が高まり、好きになった。私も三郷町の大和川清掃や七夕まつりのボランティアに参加したこともあったが、話を聞いていると、もっと三郷町に対してできることがあったのではないかと少し後悔している。三郷町を離れても何かできるところがあれば今後も関わっていききたいと思った。

2017年度の地域住民へのインタビュー調査を通して、インタビュー調査の価値（インタビューをしやすい雰囲気があった。「悠々卓球」にお邪魔させていただいた時も、練習中にも関わらず、時間を割いて話を聞かせていただけたのは本当に嬉しかった。また、自分たちで足を運んで話を聞きに行ったほうが、より良い話が聞けると実感した）、地域への自身の体験も伴った実感的理解の醸成（「三郷町の良いところ」については、皆さんの回答がよく似ており、空気が良くて、住みやすくて、綺麗な夜景が見られることなどである。私自身、夜に大学から帰る時、大学構内の坂道を下りながら、夜景が綺麗だと思ったこともあるので納得できた。Oさんは、信貴山の頂上から綺麗な朝日が見れるとおっしゃっていたので、三郷町に住む方には一度見てもらいたいと思った。一方で、三郷町の不便なところについて、スーパーやコンビニが少なく、家から買い出しに出かけ



るときは困るという話も聞いた。私自身も大学まで歩いて行く時は、きつい坂道だと思いながら歩いているので、高齢者の方々には負担になると思う)、地域を支えるボランティア活動への理解(ボランティア活動に関しては、さまざまなものがあり、小学校に行って草刈や田植えの授業をする方もいれば、三郷小学校のボランティアコーディネーターの方もおられたし、戦争の語り部さんをやっておられる方もおられた。視覚障がいをもつ方のための広報誌の読み手をされている人もおられた。さまざまなボランティアがあり、私自身知らないことばかりだった)、新しい地域資源の発見と提案(若者に三郷町のアピールをするためにも、信貴山のどか村や保養所等のアピールをもっとする必要があるのではないか、今後の三郷町については、おじいちゃん世代の方たちは口をそろえて、「信貴山のどか村」のことをあげていた。のどか村をもっと売り込みたい、子どもも大人も楽しめる施設にしてほしい、温泉などの娯楽施設があればなどの意見が多かった。)といった学びがあった。

3年次以降の専門ゼミナール活動では、1, 2年生で培ったアカデミックスキルをさらに磨くことが求められる。アカデミックスキルとは、文献や人から情報を収集し、データを分析する技術、レポートや論文を記述する技術、成果報告・研究発表といったプレゼンテーションの技術である。それらの技術獲得の中で、研究倫理の重要性も問われる。事前にインタビュー調査の研究倫理について講義をしたものの、実際の調査は学部生が単独でインタビュー調査を行うため、何のためにインタビューデータを得るのかといった目的の明確化には、半年間の時間を要した。地域理解を深めることや地域住民との人間関係の土台作りをしたことにより、学生自身が地域で活動することの意義を見出せたと思われる。

最後に、本教育実践から得られたデータをもとに、地域をテーマとした教育実践の学習モデルを作成した。

☐ 内は、学生が本実践から身に付けると期待する資質・能力(技術)である。

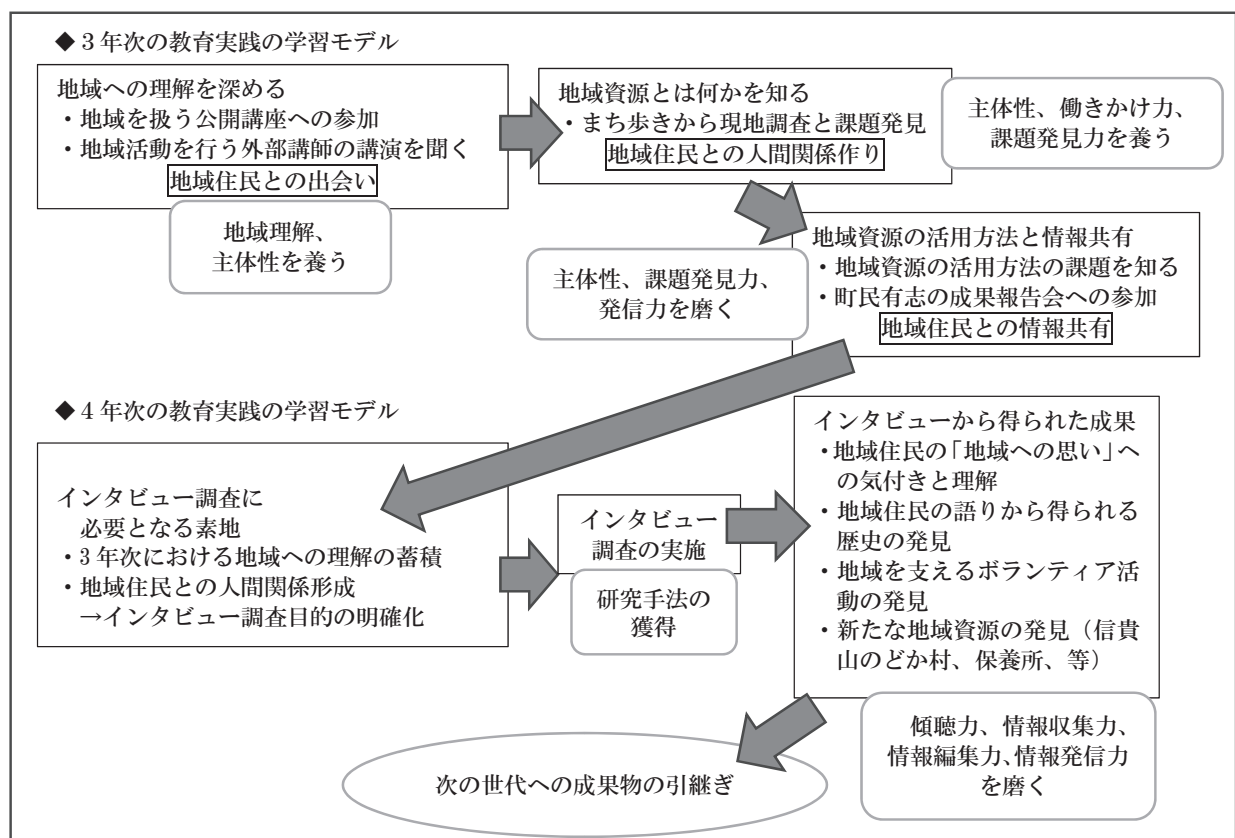


図2 ゼミナール活動における地域をテーマとした教育実践の学習モデル

## V. おわりに

地域をテーマとしたゼミナール活動における教育実践を遂行するにあたって、得られた成果には2つの側面があると思われる。1つ目は、学生のアカデミックスキルの向上であり、2つ目は、教員の教育力の向上である。1つ目はIVにて前述した通りの成果であるが、2点目の教員の教育力の向上については以下である。地域をテーマとしたゼミナール活動では、連携協力者をどのように得るかという課題から始まるが、筆者の場合は、学校支援ボランティアコーディネーターという協力者のもと、ネットワークを広げることができた。連携協力者を得た後も、ボランティア団体やNPO法人、企業、自治体とそのネットワークはさらに広がった。個人・団体との関わりが増加するということは、各個人・団体に対する連絡事項も増え、皆がわかりやすい資料作りの技術を要する。つまり、管理能力や情況把握力が養われる。また、いつの時点で何を学生に学ばせたいかを常に考えることができ、学生ファーストの教育計画の立案が磨かれる。

2019年度は、これまでの学生の成果を土台として、「地域資源の活用と課題～農業公園信貴山のどか村の現状調査分析から～」、「映像保存の意義と価値～龍田古道を事例として～」を行うことになった。地域をテーマとした活動の価値は、蓄積されたデータを元に、次の世代の活動へとつながられると同時に、地域住民との人間関係がさらに形成され、ボトムアップの地域活動が可能になると思われる。今後は、地域をテーマとした学生の学びの効果・評価について検討したい。

## 参考文献

- 有村安生（2012）「地域連携型教育について：ゼミの活動を通して（1）」九州共立大学・九州女子大学・九州女子短期大学生涯学習研究センター紀要（17）、pp.121-135
- （2013）「地域連携型教育について：ゼミの活動を通して（2）」九州共立大学研究紀要4（1）、pp.37-44
- 飯塚重善（2018）「大学教育における地域連携活動のあり方に関する一考察」神奈川大学国際経営論集（55）、pp.97-111
- 井野よし子・川原直輝・川口莉世（2018）「PBLを基にした大学と社会（地域）をつなぐ調査研究：～若者の朝食調査～」太成学院大学紀要20(0)、pp.215-218
- 池田幸應（2011）「大学コンソーシアム石川ゼミナール連携型事業における学生の地域連携活動」金沢星稜大学人間科学研究4（2）、pp.49-54
- 池田幸代・小早川睦貴・中尾宏（2016）「大学の地域連携による学生教育の取り組み～地域資源を活用した商品開発プロジェクト」東京情報大学研究論集（20(1)）、pp.1-14
- 伊藤真（2017）「博物館職員と大学生とが「協働」する試み：「秋田大学地域連携プロジェクトゼミ実施報告」秋田県立博物館研究報告（42）、pp.37-46
- 鹿田正昭・徳永光晴・土田義郎・下川雄一・神山藍・川本拓見・中山尚武（2015）「K.I.T.空間情報プロジェクトの活動成果と地域連携について」工学教育研究（23）、金沢工業大学、pp.83-96
- 河野義広（2014）「千葉県花見川区魅力発信プロジェクト「花見川どっとcom!」の運用体制作りと今後の展望」東京情報大学研究論集18(1)、pp.35-44
- 権田恭子（2017）「空き店舗活用を通じた大学におけるアクティブラーニングの実践：柏崎市委託事業「まちかど研究室」を事例として」新潟産業大学経済学部紀要（49）、pp.11-31
- （2018）「大学におけるアクティブラーニング推進のための学内連携体制の構築：「『大学は美味しい!!』フェア」

- 参加に向けた商品開発、販売実習の実践を手がかりに」新潟産業大学経済学部紀要（51）、pp.27-53
- 庄司一也・赤井博信・野原倫・岡崎将吾・弘中明彦「地域連携型PBI「西京銀行 課題解決型インターンシップ（若旅 in やまぐち）」の実践：地域ゼミ（地域課題によるPBL体験）の一事例として」徳山大学総合研究所紀要（40）、pp.47-56
- 田中卓也（2018）「専門演習における地域と連携した取り組み（3）」共栄大学研究論集（16）、pp.117-128
- 田中卓也・兼古勝史・小林田鶴子（2017）「専門演習における地域と連携した取り組み（2）宮代町里山自然体験活動を中心に」共栄大学研究論集（15）、pp.265-285
- 手嶋慎介（2013）「地域連携PBLの試行的実施の成果と課題：名古屋市名東区を舞台としたゼミ活動における就業力育成（1）」東邦学誌42(2)、愛知東邦大学、pp.31-43
- 一（2014）「地域連携PBLの試行的実施の成果と課題：名古屋市名東区を舞台としたゼミ活動における就業力育成（2・完）」東邦学誌43(1)、愛知東邦大学、pp.47-56
- 豊田典子・堀裕子・村川京子（2017）「保育者養成校の保育表現技術系ゼミによる地域連携活動での学びの一考察：2015・2016年学生へのアンケート結果から」大阪人間科学大学紀要（16）、pp.105-128
- 鳥居恵治・山下晋・藤原貴宏（2015）「地域連携型親子体操教室におけるアクティブ・ラーニングの実践」岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究（1）、pp.57-63
- 谷口美佳（2019）「短期大学生における継続的地域連携活動の学習効果について：料理教室準備ゼミ活動報告」教育研究実践論集編集委員会編（7）、四天王寺大学、pp.91-100
- 田村裕人・海老沼舞・市沢梨沙・青柳和樹・小堀宏樹（2018）「学生提案成果報告 栃木県平成29年度大学・地域連携プロジェクト支援事業 宇都宮共和大学シティライフ学部 小浜駿・和田佐英子・吉良貴之ゼミ（県外協力ゼミナール 中央大学商学部御船洋ゼミ・城西大学経済学部安田新之助ゼミ）若者の人生選択と居住地選択（1）就活編」宇都宮共和大学都市経済研究年報（18）、宇都宮共和大学都市経済研究センター、pp.149-151
- 鳴岡菜摘・高須こはる・太野垣奏絵・美濃部慎子（2018）「ゼミにおける地域連携の取り組みについて：豆腐づくり体験プログラムの計画と実施 <「食のプロジェクト」学生報告>」北摂総合研究所報（2）、pp.27-32
- 松下啓一（2018）「松下ゼミと地域連携：若者たちの笑顔と奮闘（特集 人間社会学部における地域連携の取組み：これまでとこれから）」人間社会研究（15）、相模女子大学、pp.11-17
- 森恭子（2018）「住民の地域課題の解決力を高める実践：福祉SOSゲームの可能性」人間科学研究（39）、pp.61-74
- 森下一成（2017）「地域連携による若年世代の社会教育利用促進施策に関する一考察：渋川市中央公民館における「ジブんと社会をつなぐゼミ」でのキャリア教育の実践と課題未来の保育と教育」東京未来大学実習サポートセンター紀要（特別号）、pp.101-109